2025 年度

国際政治経済学部

総合型選抜 I 期(英語資格型)

【小論文】

60 分 100 点

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

倍速視聴懐疑派が「早送りなんかして内容が理解できるのか?」と訝しむ一方、倍速視聴推進派は「余裕で理解できるし、倍速に慣れると通常速度がスローモーションみたいで気持ち悪い」と言い返す。これは「倍速視聴に対応できる人はそうでない人に比べて、単位時間あたりの情報処理能力が高い」ことを意味するのだろうか?

映像作品、なかでもエンタテインメント作品は、その歴史の過程で、単位時間あたりで伝えようとする視覚情報の量を等比級数的に増やしてきた。

昨今のいわゆる大衆娯楽映画、たとえば「アベンジャーズ」シリーズなどのアメコミ映画と、1980 年代あたりの大衆娯楽映画とを観比べてみれば一目瞭然だ。ひとえに撮影技術、中でも特撮や VFX の進化によるものだが、とにかく画面の描き込み密度が大きく上がっている。1 シーンたった数秒の間に複数の爆発が起こり、建物が崩壊し、何人もの人間が同時に吹っ飛ぶ。カメラが高速移動しながらその状況を捉える。閃光や瓦礫や塵や煙が CG によって山ほど描き足され、空気や光のゆらぎといったエフェクトが目一杯盛られ、画面中が情報で埋め尽くされる。初見ではとても隅から隅まで視認することができない。そんなシーンが、ジェットコースターのように次から次へと繰り出される。

年配層の中には「最近の映画はごちゃごちゃしていてうるさい」と感じる人もいるだろう。でも、今はそれが標準だ。洪水のような画面内情報量と一瞬たりとも飽きさせないスピーディな展開に慣れると、今度は動きの少ない画面や冗長な展開に我慢ができなくなる。

つまり倍速視聴に慣れた人たちは、倍速視聴に慣れていない人に比べて、コンテンツから提供されて「快適だ」と感じる単位時間あたりの情報量が多い。だから、単位時間あたりの情報提供量が少ないコンテンツは「間延びしている」と感じる。そのじれったさを解消するには、摂取スピードを自前で速めるほかない。

青山学院大学のアンケートで最も倍速視聴されていた映像ジャンルは「大学の講義」だった。その理由として、「効率的だから」と並んで目についたのが「そのほうがむしろ集中して聞けるので、頭に入る」である。

実は大学教授には早口の人が多く、授業もかなりスピード感がある。それでも学生たちが早送りするのは、もはや彼らが”生身の人間が話す速度”にイライラするためかもしれない。早送りに慣れた大学生たちは、実際に人間が喋る速度にまだるっこしさを感じる。そのギャップを倍速視聴が埋めるのだ。

ABEMA には、ニュース映像が最初から 1.5 倍速の「アベマ倍速ニュース」という番組がある。YouTube 動画の中には、冒頭に「この動画は倍速でも視聴できます」といった趣旨の理を入れているものもある。その YouTube で昨今目立つのが、漫画調の絵に不自然なほど早口のセリフやナレーションが乗っている美容系動画広告だ。いずれも確固たるニーズがあってこその計らいである。

若者の単位時間あたりの情報処理能力が上がっているという点については、2010 年代初

頭から毎年、就職サイトでさまざまな企業の新入社員のインタビューを行っている 60 代のベテランライターも同意する。彼いわく「10 年前と今とでは、同じ新入社員でも会話していてまったく違うと感じる」そうだ。ここ 10 年は、YouTube と定額制動画配信サービスが普及して、「安価に視聴可能な映像コンテンツ」が爆発的に増えたディケイドだ。その最後の直近 2、3 年で、倍速視聴や TikTok による短尺動画の大量消費が習慣化した。

彼らが日々大量の情報と物語を摂取するあまり疲れているのは事実だが、一方で短時間で大量の情報をさばかざるをえない状況にさらされることで、単位時間あたりの情報処理能力が上がっている、とは言えそうだ。これは、「早送りで観ても、作品の細かいところまで理解できないのでは?」という疑問に対する、ある種の反論材料になるのかもしれない。

無論、情報処理能力と作品観賞能力は別物だ。しかし、彼らが非倍速視聴者とはまったく異なる処理速度の CPU で映像に向き合っている可能性もまた、否定できない。映像の作り手は今後より一層―好むと好まざるとにかかわらず―この事実に向き合うことになる。

（稲田豊史著『映画を早送りで観る人たち ファスト映画・ネタバレ
―コンテンツ消費の現在形』光文社新書より抜粋）

問１　本文を 300 字以内で要約しなさい。

問２　「倍速視聴」がもたらす功罪について、あなたが考えることを 500 字以内で具体的に述べなさい。